

《本号の表紙絵》

閑叟公於御前世嗣子淳一郎君種痘之図

陣内松齡筆

(絹本着色掛軸, 201×111 cm, 佐賀県立病院好生館所蔵)

この図は嘉永2年(1849)8月22日佐賀城本丸奥殿で、侍医大石良英が第10代鍋島直正の世嗣子淳一郎(第11代直大)に種痘を行っている情景を描いたものである。立っているのは直正、横は古川松根、介添は中老園田、手前は老女松島、隣りは松根の長男源一郎、片肌脱いでいるのは榎林宗建の長男永叔である。

弘化4年(1847)肥前佐賀では天然痘が流行し、直正は伊東玄朴の進言を入れ牛痘苗の取り寄せ方を榎林宗建に命じていた。嘉永1年(1848)バタビアから出島に着任した商館医 Otto Mohnike が持参した牛痘漿は失活し種痘は不成功であった。翌嘉永2年(1849)6月もたらされた牛痘痂は、宗建の三男建三郎と長崎通詞ら2人の子供に接種され建三郎1人が善感した。建三郎の痘漿は永叔に伝種され、その後江戸では11月11日伊東玄朴により直正長女貢姫に伝種された。

建三郎は明治29年(1896)3月4日、「ジェンナー氏種痘発明百年期記念会・シーボルト氏第百回誕生節会」として上野不忍池畔長醜亭で開催された「第5回医家先哲追薦会」に参加している。

この図の左下には「二千五百八十七年 松齡謹写」とあるが、これは秀島成忠(海軍少将・軍事史家)が幕末期佐賀藩の開明的な諸策を絵図に残すため、第12代鍋島直映(ケンブリッジ大学史学卒)と考証を重ねて描いた原図を昭和2年謹写したものである。他に「長崎海軍傳習所並出島和蘭屋敷図」、「鍋島直正品川台場巡視之図」、「佐賀藩精煉方絵図」や「築地反射炉絵図」などがある。

(前山隆太郎)